

Title	臨床哲学的余白 [Vol.4]
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 4 P.30-P.31
Issue Date	1999
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/10736">http://hdl.handle.net/11094/10736</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

10月15・16両日にわたって、大阪大学にて第50回日本倫理学会が開かれた。その場で臨床哲学に関する初めての発表として、武田保江・本間直樹両氏による共同研究発表(「失語症とその看護が問いかけるもの——他者理解とコミュニケーションについての臨床哲学的視角」)と、中岡成文・鷲田清一両氏による共同研究発表(「臨床哲学というプロジェクト」)が行われた。

武田・本間両氏の発表に関しては概ね好意的な質問が出され、とくに福祉関係の研究をされる方から発表後有意義な示唆をいただいた。一方臨床哲学の理念に関する中岡・鷲田両氏の発表については、臨床哲学に対する様々な疑問が浴びせかけられた。そのなかでこの

れる。他者の言葉はさしあたりは未完成でつたないものであることが多いが、それでもそこから他者と共に問いを引き出す感受性が必要とされる。「高校生の文章」であろうがなかろうが、そこに問うべき問いを見出すことができるかどうかは、むしろ読み手の感受性の問題なのではないか。メチエという媒体が意図しているのは、既に完成し何の疑問点もない「研究成果」なるものを提示することではなく、未完成でかつヴァルネラブルなものをあえて出し、読者と共にさまざまな角度から批判的に補い合うという共同作業である。一言でいえば「臨床的なもの」でもっとも重要なのは、可謬的でフィードバック可能な成果なのである。

## 臨床哲学的余白

メチエに関して(某大学院生より)「高校生の書くような文章が載っているけれども、それが臨床哲学なのか？」という質問があった。それに対してメチエの制作者としてこの場で応答しておきたい。

まず何よりも残念なのは、この発言が内容に敢えて関わろうとしないという点で無内容であることだ。「高校生の文章」という規定によって何がそこから排除されるのか?——それを問うことからまず始めなければならない。

今回の特集である哲学プラクティスでは様々な経験の中で感じ取った些細な疑問や問いなどを他者の声から聞き取ることが重視さ

そもそも哲学をすでにできあがった成果としてしか評価しない者にとって、哲学の実践とはいかほどの意味があるのだろうか?「子どものための哲学」というものがヨーロッパで試みられている。(それについては寺田さんの文章を参照のこと。)それをうけて臨床哲学では中等教育における哲学の教育の可能性を模索している。そうした「教育」の場では、高校生などに哲学の知識を押しつけるのではなく、彼ら/彼女らの生きるその場から問いを紡ぎだしていくことが重視される。しかし、大学という哲学の専門的教育によってある人がある特定の場所で感じる問題というものに対

する感受性を擦り切らせてしまうことは少なくない。我々臨床哲学のメンバーも例外ではなく、そのように鈍磨した感性を、専門外の場所でふたたび発見することは決して無駄なプロセスではないだろう。

さて今回のメチエの特集は「哲学プラクティス」である。我々は海外の流行を追いそれを輸入することを意図しているのではない。むしろ我々は臨床哲学と併走する様々な試みと手を結び合って常に進化しつづけることを目指すだけである。先の中岡・鷲田両氏への反応をみてもそうだが、臨床哲学についての議論は現実の問題に関わる前にあまりにしばしば理念をめぐるそれに集約してしまう。が、哲学プラクティスのように既に10年以上もかけて現実に活動を続けていく人たちの姿を見て、今切実な問題として我々の前にあるのは、我々にとって実際に何ができるのか、実践可能なものとしてどのような選択肢があるのかを具体的に考えることだろう(むしろ「理念なるもの」は後からついてくるものなのかもしれない)。

差し当り、臨床哲学は少なくとも次の三つの可能性に対して開かれているだろう。

1 : 哲学プラクティスが大学などの研究機関に属さない人たちによって営まれているように、臨床哲学もまた、臨床哲学を学んだ者が、所謂「研究者」としてではなく研究機関の外で活躍するという可能性。(例えば、高校生・大学生・社会人を対象にした哲学セミナーを有料で開き、ソクラティック・ダイアログや哲学コンサルタントを行うなど。)

2 : 既になんらかの職業についている者が一時的に考える機会を得る場所として臨床哲学に参加し、その後自らの実践の場に戻るという可能性。(例えば、看護職、教育職などに就く人たちが研修期間として一時的に大学で学ぶ時間を得られるようにすること。あるいは、1の哲学セミナーに参加するなど。)

3 : 哲学研究者が医療・看護・福祉・教育などの専門家と共同に研究する可能性。(例えば、今回の日本倫理学会での失語症についての武田・本間の共同研究など。)

このように、臨床哲学は《大学の外》《職業の外》《専門の外》の三つの意味で「外」に開かれた可能性をもつ。この三つは矛盾するものでないし、臨床哲学に参加する者がそれを各自選び取るものであるが、そうしたことに耐えうる基盤を当研究室として準備しなければならない。

そのためにもやはり、ヨーロッパの哲学プラクティスを試みる人たちが直面している様々な実際上の問題から学ぶことが多いだろう。そしてソクラティック・ダイアログや哲学カウンセリング/コンサルタントにしても、それを臨床哲学が全く同じ仕方で模倣するのではなく、それを我々流に改変してゆかなければならないだろう。それは、「ダイアログ(dialogue)」という名の示すとおり、ごく日常の場面でもロゴスと議論を重んじる文化に対して我々が真摯に向き合うことを意味するはずだ。(編集者)

(次回のメチエ2000冬の号特集は、「セクシュアリティ」です。)